

# 創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

## IX / 新しい世界

著 / ヘンリーモリス

訳 / 宇佐神 正海

— 1976年版 —

## 第2部 創造主の造られた世界

### IX 新しい世界（創世記九章）

#### 人間政府の樹立

「人の心に計ることは」ことごとく悪であるという事実にもかかわらず、神は再び、人をのろい地を滅ぼすことはすまいと心に定められ（創八・二二）、九章でまたノアに直接語りかけられました。九章の初めの十七節は、箱船を出て信仰による犠牲をノアがささげたのに応えて与えられた、神ご自身のことばを詳しく引用しています。これらの節には、神に代わって施行される人の政府樹立のための基本的準備が含まれています。また、そこには洪水後の人を含めたノアに対する大きな契約も含まれています。契約後すでに数千年経過していますが、この契約は神に関する限り、今もなお有効です。

九章一～二節　それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。野の獣、空の鳥、——地の上を動くすべてのもの——それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。」

これらの節は、本質的に神によって人に与えられた元来の命令である一章二六節から二八節をわずかに修正し、更新したものです。アダムとエバが、「生めよ。ふえよ。地を満たせ」と告げられたように、ノアと三人の子どもたちは、もう一度、すみやかにふえ、地を満たすように命じられました。神の計画は、人類が地上に住める地域のすべてにすみやかに広がり、神の主権の下に人が適切に地に支配権を行使することでした。実際にここでは、一章二八節でアダムに与えられた特別な命令「地を従えよ。……を支配せよ」がはぶかれていきます。これは、おそらく、洪水で多くの地上の生物が失われたにもかかわらず、ヨハネの手紙第一、五章一九節にあるように、少なくともサタンがなお地上での支配権を持っていることを暗に示しているのでしょう。こうして人は、かつて人の特権であったと思われる権威を、もはや被造物である動物に対して直接に行

使することもなく、動物が人に従い、理解されるというよりも動物に恐れられるようになりました。もし、そうでなければ、動物はヒトよりも早くふえ広がるので、動物はすみやかに人類を根絶してしまっただけかもしれません。

人を恐れる性質を持った動物に「野の獣、空の鳥、地の上をはうすすべての動物と海の魚」が含まれている意義は重大です。しかしながら、「家畜」はこの範疇に含まれていないように思われます。家畜という用語が意味している飼いならされる動物は、人の前に出たり人ともにいることを避けたりしません。しかし、他

のすべての動物は、通常可能な限り、人が近づけば逃げようとしています。神の支配権の下に責任ある管理人としてであることはもちろんですが、人は思いのままにこれらの動物を取り扱う自由があるという意味で、これらの動物が人の手に渡されたのです。

九章三〜四節　生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。しかし、肉は、そのいのちである血のあるまままで食べてはならない。

さらに、動物が初めて食用として認められました(洪水前に、許可なしに食用に供せられたかもしれないが)。この変化を来した理由は明らかではありません。おそらく、新世界でのより厳しい環境から、人の栄養のために通常の食物に入っているタンパク質では足りなかったため肉に入っているタンパク質を必要としたことでしょう。また、主はおそらく、こうすることにより人と動物の間にある大きな隔たりを示そうと望まれたことでしょう。それは、すべての肉の生命は進化論的連続性によるという間違った教えが出てくる危険性を予測していたのかもしれませんが。この教えは結局のところ、人と動物を同列に置き、創造者を否定し、ヒトが創造者にかたどって造られたことを否定します。実際に、その教えの初期の出現は、異教と多神教の初期の形態にすでに見え始めています。

明らかに、この時点では食べることで動物に関する制約はなされていなかったのです。しかし、イスラエルに対する特別な摂理として食べることで動物として、あとで神によってほんのわずかな動物が「きよい」ものと命名されました。もともと人はすべての緑の草を自由に食べられるように創造されたのですが(創一・二九・三〇)、その上にイスラエルの召命前とすべての民族から信者が加えられた教会の形成後の両方で、一般に人類は、「生きて動くすべてのものを」好きなように食べる自由が与えられました。もちろん、食べたくない生き物や植物を遠ざける自由もあったのは明らかです。

しかし、この許可にも制約がありました。すなわち、「肉は、そのいのちである血のあるまままで食べてはならない」のです。肉は食料として与えられましたが、肉のいのちは犠牲のために与えられたのです。「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である」(レビ一七・一一)。これらの節にある「いのち」と「たましい」は、ヘブル語ではネフェシュで、同じことばです。もちろん、血液は、空気や食物から、私たちのからだに必要な化学物質をとって、運搬する生理学的機能を果たし、肉体を維持し新しくします。特に、脳の意識と通常の思考過程を維持します。この非常に複雑なすばらしい働きのすべてが、「いのち」または「たましい」と呼ばれます。動物のいのちを植物のいのちと区別するものは、この意識です。犠牲の祭壇にそそぎかけられた動物の「いのち」は、罪を犯した罪人のいのちの身代わりの死として神に受け入れられました。罪人は死に値しましたが、彼の罪を贖うために流された犠牲の血のゆえに赦されました。

もちろん、動物の血はただ比喩的のみ罪を覆うことができました。その比喩で表わされた実態は、神の子羊であるイエス・キリストの犠牲でした。イエス・キリストは「ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです」(ヘブ九・二六)。

九章五〜六節　わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどん

な獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

このように、動物のいのちを表わしている血は聖なるもので、食べるべきではありません。動物の血は、人のいのちの身代わりの犠牲として受け入れられました。また、単に人の食欲を満足させるためのものとしてだけではなく、神によって特別に創造されたものとして、いのちの原理に対する尊敬の思いも含まれていました。動物であろうと人であろうと、殺した敵の血を飲むことは、その生物のいのちの特質が征服者のいのちに組み込まれるはずだという異教的考えに対する神の警告である可能性がこの句にあるのです。

いのちを表わす人の血は動物の血よりずっと神聖でした。なぜなら、「神のかたちにかたどって人を造られた」からです。動物はたましいと肉体に関しては人と同じものを分かち与えられていましたが、神のかたちによって象徴される永遠の霊を持っているのは人だけでした。人の血を流すどんな獣にでも人にでも神は備を要求したでしょう。それは彼ら自身のいのちである血そのものでした。

「要求」ということは法律用語です。神は聖なる法律の違反に対して厳格なきびしい罰則を課す裁判官として表わされています。獣が人を殺した場合、その獣は必ず殺さなければならぬ(出二一・二八参照)。もし、人が他の人を故意に殺したならば、「すべての人の兄弟」によって処刑されなければなりません。後の節は、もちろん家族による報復的虐殺の手ほだきを意図したのではなく、法の施行を監視する責任がすべての人にあることを強調しようとしているのです。これらの語が初めて語られた当時、すべての人は文字通り兄弟でした。なぜなら、当時、生きていたのはノアと他にはノアの三人の息子たち、すなわち兄弟だけだった

からです。したがって、その後のすべての人々は、これらの三人の人と彼らの妻たちから出てきたはずで、こういうわけで、すべての人は、かつてこれら三人の兄弟の腰にあつたのです。これは本質的に人間の司法組織を公のものとして樹立するようという命令です。特に、殺人の場合、法が確実に実施されるためでした。

こうして、神のさばきを殺人者に執行するこの権威は人に委託されました。「人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。」ノアの洪水前に発展した無政府主義的状況、すなわち、人は殺したい者を殺し、できる限り自分を守るといふ状況の繰り返しはもはや許されるべきではありませんでした。洪水前には、父親の族長的権威を用いる以外には、人の政府を公的に樹立する方法は明らかになかったのです。カインやレメクの個人的歴史からもわかるように、殺人のような最も重要な犯罪に対して、犯罪を罰し、犯罪を防ぐための公的機関もありませんでした。各自は自分の良心と利益にとらわれなければ、おそらく、すべての束縛から全く自由に行動することができたでしょう。しかし結局、このことは暴力と無政府状態を行き渡らせるようになりました。洪水後、同じ状況をもたらすのを防ぐため、特に死刑に対する権威を持つものとして、神は人間による政府の制度を樹立しました。

もちろん、死刑に対する権威は、これらの人の行動や個人的関係を監視する法律を確立する権威をも意味します。そしてそれらが調整されないと、(例えば盗み、姦淫、土地の横領などで)すぐ殺人に導かれるのがわかるはずです。こうして、ノアに対するこの単純な教訓は、すべての人の法律上の、また政治上の制度の最も重要な基礎です。

ここで与えられている教訓は、ただ復習に関するものだけではありません。むしろ、罪によって神のかたちをそこなっている人が、正義と、人のうちに神のかたちである聖さを注意深く認識できる点が強調され

ています。ここには公式の法律制度は述べられていませんが、犯罪が確かに行われているかどうかを公平に立証するために、判決が下される前になすべき幾つかの手段が明らかに想定されています。時間と場所によって政府の体制は変わるかもしれませんが、神の下に施行されている人間の政府があるという事実は明らかです。

近代の自由主義的な人々による死刑廃止論は、この神の命令を破棄する十分な根拠にはなりません。「殺してはならない」というモーセの十戒は、個人的殺人だけに適応するのは明らかで、法的処刑とは関係ありません。事実、モーセの律法自体は、殺人に対してだけでなく、十戒のどの一つを破ることに對しても、刑罰として死刑が当てられています（ヘブ一〇・二八参照）。

同じように、キリスト者に対する制度は決してノアに對する神の契約を否定するものではありません。例えば、肉を食べること（一テモ四・三、四）、血を避けること（使二五・一九、二〇）、政府の權威を示す剣（ロマ一・三四、使二五・一一）は、新約聖書で再認識されています。これらのことを初代のキリスト者たちに強調したのは、ユダヤ律法の一部であつたからではなく、すべての人に対してノアを通して与えられた神の契約の欠くことのできない部分であつたからです。事実、イエス・キリストが「剣を取る者はみな剣で滅びます」（マタ二六・五二）と言われた時、それはノアに對する神のことばの反響のように見えるのです。

このことは、殺人罪に對する処罰は死刑以外にはありえないというではありません。神にとつて裁判は、特に、真の悔い改めに答えて、あわれみによつて和らげられてもよいのです。例えば、ダビデはバテ・シエバとウリヤの場合に姦淫と殺人という死刑に価する罪を犯しましたが、悔い改めたので神は赦されました。それゆえ、厳密に言えばダビデは剣、または石打ちの刑を受けるのに相当していたのに、「彼は長寿に恵まれ、

齢も富も誉も満ち満ちて死んだ」（一歴二九・二八）のです。姦淫の罪を犯すと、モーセの律法では死刑に当たる罪でした（レビ二〇・一〇、申二二・二二）が、主イエスは姦淫を犯した女の悔い改めた心をごらんになって、彼女を赦そうとされ、訴える者の手から彼女を救われました（ヨハ八・三〜一一）。同様に、裁判官、または制度化された政府の特別な機関が、死刑に對する厳密な法的制裁を遂行するのが全く間違っていないとしても、判決を決定するに当たつて、場合によつてはこのように罰を減ずる要求を認めるのも正しいに違いありません。要点は、これによつて司法組織に對する責任が人々に与えられ、この責任は、第一に人生の神聖さを、第二に殺人に對する正しい法的制裁としての死刑との両者を承認することを伴うという点です。

ヘブル語のシャファクは興味深いことばです。聖書に初めて出てくるのは創世記九章六節で、シャファクは「流す」と訳されています。シャファクはしばしば、「注ぎ出す」、または「注ぐ」、または「流れ出させる」と訳されています。シャファクは詩篇六九篇二四節での神の憤りを「注ぐ」とか、ヨエル書一章二八節の「わたしの霊を……注ぐ」というようにしばしば訳されています。何回も、シャファクは、「血をことごとく祭壇のもとに注ぐ」（レビ四・三〇、協会訳）に言及しています。シャファクは「私は、水のように注ぎ出され」（詩二二・二四）とイエスの十字架上的の叫びを預言的に示すことばとして用いられています。

創世記九章六節でシャファクが初めて用いられていることは人のいのちの神聖さを強調するだけでなく、「神のかたちにかたどられた」最も安全で永遠の存在である唯一の方を指し示しているのです。そして、その方の血が人間政府の權威によつて、法的ではあるが全く不条理に流されることを予表していたのでしょう。しかも、神の定めた計画において、「彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえと」（イザ五三・一〇）したのです。

九章七節 あなたがたは生めよ。ふえよ。地に群がり、地にふえよ。」

これらの命令の最後に、神は地を満たすようにと命令を繰り返されました。文字どおり訳せば、大軍をなすようにふえよという意味です。事実、おそらく四千年と少しではありましたが、人の数は、八人の人からほぼ六十億人に増加してきました。この数は一家族平均二・五人の子どもになり、一年につき〇・五%の増加率となります。

## 虹の契約

ノアとその子孫の責任に関する限り、神とノアとの契約は、多くの要素があり、その幾つかをすでに検討しました。しかし、契約ということば自体は九節に初めて用いられています。それは、地球を大洪水(マップール)で再び滅ぼすことはしないとの神の約束と関連して用いられており、したがって、強調点は人の責任ではなく神の約束に置かれています。事実、これらの命令に対する人の服従は、神がご自身の契約を守るかどうかを決定する条件ではありませんでした。結局、ノアの信仰とささげ物の結果として条件をつけずに、神は、地球が続く限り、再び全世界的洪水を送つてすべての肉なるものを滅ぼすことはしないと約束しました。

さらに、神はご自身の約束を守る美しいしるしをノアと子孫に与えました。

空には雲が浮かび、また雨が降りそうで、将来、時々局地的洪水が起こりそうでしたが、それにもかかわらず決して全世界に及ぶ洪水を再びもたらさない保証として、神は虹を設定されました。一三節にある「雲の中にある虹」は、もちろん虹が形造られるために太陽光線と大気中にある液状の水のしずくである「雲」を必要とします。洪水前、上空には目に見えない水蒸気だけがあつて、虹が起こる可能性はありませんでした。洪水に続く新しい水の循環で、以前の水蒸気の水蒸気はもうありません。そして、今や全世界に及ぶ洪水を引き起こすのに十分な水を、実際に大気中に引き上げることが不可能です。嵐が激しくても、雲が多くの水を振らせていつも虹が現れます。そうして神は、大洪水の後の約束を私たちが思い起こすことを望んでおられます。

九章八〜一〇節 神はノアと、彼といっしょにいる息子たちに告げて仰せられた。「さあ、わたしはわたしの契約を立てよう。あなたがたと、そしてあなたがたの後の子孫と。また、あなたがたといっしょにいるすべての生き物と。鳥、家畜、それにあなたがたといっしょにいるすべての野の獣、箱舟から出て来たすべてのもの、地のすべての生き物と。」

神はノアとその子孫たちに、彼らと彼らの子孫の将来の責任に関して教訓を与え終わった後、しばし彼らに対する話を休まれたようです。それからもう一度、話し始められました。今回は虹に関する素晴らしい約束を伝えるためでした。

聖書にはたくさんの大事な契約があります。例えば、モーセと結んだ契約、イスラエルの民と結んだ契約、ダビデと結んだ契約、そして、特に「新しい契約」(ヘブ八・八)などです。しかし、創世記六章一八節にある約束を除いて、事実上これらの節でこの言葉が初めて使われました。そういうわけで、おそらく、これが最初の契約でした。ある学者は、エデンの契約、すなわちアダムの契約を強調しますが、契約ということばはヘブル語のベリースであり、神がアダムに語られた時には用いられませんでした。創世記三章一五節の原始福音の約束は、このような契約として理解できますが、聖書自体は、その場では契約ということばを用いていません。

ノアの契約は、ノアとその子孫だけではなく、箱船から出た動物とその子孫に関わりがあったことは大切です。動物は人間のように永遠の霊と魂を持っていませんが、動物も神の被造物であって、神はこれら被造物をも心に止めておられるのです(マタ六・二六、一〇・二九、ヨナ四・一一参照)。神が野の獣について二回述べていることは特に意義深いものでしょう。あたかも創造者にとって表面上動物界のうちで最も関心が薄いと思われる野の獣に対してさえ、神にとっては関心があると強調しているかのようです。洪水は、助かるため人に助けを求めたり、飛んだりできない動物には、特に脅威になることでしょう。したがって、野の獣は再び他の全世界的洪水を決して恐るには及ばないと神は特別に約束しました。

これらの動物についての記述に注意してください。神の契約はこれらの「箱船から出て来たすべてのもの」と結ばれました。ここには、ノアの洪水が全世界的であったことについては付加的に言及されています。そうでなければ、単なる局地の洪水を生き残ったすべての陸生生物は、神の契約に含まれなかったはずだからです。

九章一〜一二節 わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。「さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。

ちょうど、六章一八節、九章九、一一、一二、一三、一五、一六、一七節で、八回用いられているように、ここでも神は「契約」ということばを用いています。結局、神はこの時代を始めるに当たって、すべての人と結んだ条件なしのこのすばらしい契約をまさに「代々永遠にわたって」絶えず覚えるべき重要なこととみなされたのです。すべての人が美しい虹を楽しむけれど、多くの人々にとってもはや神の契約と関係もなく、またこのような洪水がかつてあったということさえ、信じられないのは悲劇的です。

それにもかかわらず、神は洪水(洪水ということばの前にある定冠詞は原典において正しい)は再び決して来ないと約束されました。ここにもまた、人と共に地が洪水で破壊されたことを示す節があります。もちろん、もしノアの洪水が局地的であったなら、この節の大きな約束は意味を持たないのは明らかです。有史時代になってからも多くの壊滅的な局地的洪水がありました。

神は人と契約を結ばただけではなく、人が絶えずこの契約を思い出すように永遠のしるしを与えるとノアに語りました。しるし(ヘブル語オース)ということばは、創世記一章一四節に天体の目的と関連して「しるし」と記されていることばと、また、四章一五節でカインを保護するために神が与えた「しるし」と記さ

れていることばと同じです。

九章一三〇一七節 わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現れる。わたしは、わたしとあなたがたとの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い出すから、大水は、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水とは決してならない。虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。「こうして神はノアに仰せられた。「これが、わたしと地上のすべての肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

「契約のしるし」のため、神は雲の中に美しい虹を立てました。ちょうど、化石を含んだ地殻の岩石が、神がかつて洪水で地を滅ぼされたことを絶えず私たちに思い出させるように、雨の後の虹は、再び大洪水で地を滅ぼさないといいことを思い起こさせます。事実、後の日に熱核兵器、死の光線、細菌戦争、大気圏と水圏の汚染の脅威及び他の恐るべきことがあるにもかかわらず、少なくとも千年期の終わりまで、すなわち「地の続く限り」、「すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい」との神の約束を私たちは持っているのです（創世記八・二二、二二）。

人だけが虹を見るものではありません。神が地の上に雲を起すとき、神は「それを見」ます。そして「契約を思い出す」でしょう。これは主によると、特に、「私の虹」であって、おそらく主が地にもたらした大洪水の結果として今形成された事実に言及しているのです。斉一説の思考傾向を持った学者は、この時が虹が出現した初めての時であったとは信じられない。それで彼は、虹は数百万年も昔からあったけれども、神がこの時、虹にこの象徴的意味を与えたと言って説明します。もちろん、このような説明は、神が人を取り扱うに当たって神を全く幼稚なものとするのです。もちろん、雨と虹が前から存在していたという考えは局地的洪水説の考えで、この考えは不可能であることはすでに証明した通りです。

これらの節で、主はすべての肉なるものと交わした大いなる約束と契約をいろいろな方法で何回も何回も、繰り返しているように思われます。このように繰り返されたことばは、大洪水の恐ろしい経験をした人々に、疑いもなく大きな慰めと保証となりました。この神の約束がなかったなら、彼らは将来にほとんど望みを持つことができなかつたことでしょう。洪水の期間中、彼らを安全に守られた主は、それから人を見守り、その必要を備えてくださいます。これから来る年月、人々はこれらの約束をしばしば思い出すでしょう。多くの壊滅的な局地的洪水があり、地震と火山活動が続き、寒い冬と氷河時代さえあり、地球上には他の多くの災害があると思われませんが、これら全てはノアの大洪水による地殻変動の結果で、ノアの洪水に引き続いて起こっている激変の一部です。しかし、このような嵐と激動が起こった後、人々は何回も何回も天にかかっている美しい虹を見て、神は今なお御座におられ、世界は崩壊から守られているとの思いを新たにしたことでしょう。

さらに、人々は、神の契約は永遠に変わらないという神の約束を持っています。万物が完成され更新される神の大いなる約束の日まで、「代々限りなく」彼らと彼らの子どもたちにとってそれは有効でした。天の一方から他方にかかる虹は、神の約束は永遠から永遠に至り、初めから終わりまであることを思い起こさせるでしょう。

このように、虹は神の恵みを最も素晴らしく実例をもって表しています。テモテへの手紙第一、六章一六節にあるように、近づくこともできない聖なる御座からの混じりけのない白い光は、御座を取り巻く栄光の雲を通して屈折し（一列八・二〇、一一）、分割して、神の創造によるあらゆる栄光に満ちた色になっているようです。怒りのうちにあっても、神は憐れみを思い出されます。栄光は苦難に続きます。そして、罪の増し加わる所には恵みももっと増し加わります。

虹は聖書の中でさらにもう三回だけ現れています。最初は、エゼキエル書一章二八節で、神がその民イスラエルをさばくために訪れる準備をしている時に、神の御座を取り巻いている虹を見ます。次は、黙示録四章三節で、来るべき大いなる患難の直前に、虹が御座を取り巻いているのが見えます。この両方の場合とも、もうすぐ来るさばきと苦しみが描かれています。そのさばきと苦しみは単に限定されたもので、民の恵みがすべてに行きわたります。

最後に、黙示録一〇章一節の「強い御使い」は、この世の支配を、ノアの洪水の時に、はっきりとさばきを告げた「七つの雷」によって成し遂げます。それまで世界は神が創造されたにもかかわらず、長い間悪い者の支配下に置かれていました。また、その「御使い」は主イエス・キリストご自身にほかなりません（詩二九・三〜一〇と黙二〇・三、四を比較参照）。かつて主イエスが、私たちに代わってのろわれたものとなってつけられていたばらの冠の代わりに、「頭上には虹があった」と述べられています。ギリシア語の原文には定冠詞がついていて、「その虹」となっています。この虹は、神とすべて肉なるものとの間の永遠の契約のしるしである「わたしの虹」以外には考えることができません（創九・一六、黙一〇・六）。

さらに、この栄光ある姿にある主イエス・キリストを見ることでしょう。主は「栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです」（ヘブ二・九）。

## ノアの息子たち

いわゆる人種問題は、最近、確かに最も大切なことのひとつとなりました。民族主義対国際主義の問題も同じように大切です。現代の多くの社会学者や政治家が、すべての人種的民族の障壁を取り除く努力をしているにもかかわらず、明確な人種と民族と言語があるということは、現代生活にとって明らかな事実です。これらのことから生じる諸問題は、ほとんど手の施しようがないように思われます。

これらの諸問題を適切に解釈する前にしなければならぬことは、地球上のいろいろな人種と諸民族の起源の真理と、それに関連した出来事をはっきり理解し、総合的に考えなければならぬということです。創世記の記録だけが、これらの問題について完全に信頼性のある説明を与えてくれます。こういうわけで、創世記が言っていることを理解し受け入れることは、差し迫って重要なことです。

今日の世界には、幾つかの主な民族があり、人によって三つから六つに、またはより多くの人種に分類されています。おそらく、一五〇くらいの重要な国家があつて、三千以上の部族の言語と地方語があるでしょう。

しかし、このように多様性に富んだ人々と言語は、共通の祖先から派生したに違いありません。なぜなら、これらすべては真の人であり、肉体的に交わることが可能で、学問と教育が可能で、イエス・キリストを信ずる信仰によって創造者と霊的に交わることさえできるからです。さまざまな人種と諸民族の起源は、今なお多くの科学者にとって謎です。なぜなら、彼らは人間とその文化の起源を進化論の考え方で説明しようとして決断しているからです。人類学者と民俗学者の間にこれらに関して多くの矛盾する学説があります。唯一の完全に信頼できる人種と民族と言語の起源に関する真の記録は、創世記九章から十一章までに見いだされます。

九章一八〜一九節 箱舟から出て来たノアの息子たちは、セム、ハム、ヤペテであった。ハムはカナンの子である。この三人がノアの息子で、彼らから全世界の民は分かれ出た。

「ノアの息子たち」は洪水の期間の記事に数回出てきますが、実際にここではもう一度名指しで言われています。名が挙げられている時は、通常、セム、ハム、ヤペテの順（創五・三二、六・一〇、七・一三、九・一八）に記されていますが、実際には年齢順に書かれているのかどうかは確かではありません。ともかく、「全世界に広がった」人々は、これら三人とその妻たちからでした。現在、世界に生きているすべての人々は、三人の息子たちを通して与えられたノアの子孫です。このことを聖書は明らかに教えています（創一〇・三二、使一七・二六参照）。それゆえ、異なる民族、部族の肉体的特徴は、すべて箱舟に乗って大洪水を経たこれら六人の人々の遺伝子の組成の中に含まれていたに違いありません。いずれにしても、変異と再結合という遺伝

学的に普通に見られるしくみによって、さまざまな人種、諸民族のいろいろなグループのすべてが、この人々から始まり現在に至ったに違いありません。

このまとめの節で、ハムはカナンの父であったノアの息子たちの一人として、示されているのは特に興味深いことです。実際に、カナンは、ハムの末息子であったと思われ（創一〇・六）が、ノアの他の息子たちと歴史上なんの差もありませんでした。おそらく、彼がカナン人たちの祖先であったため、特に引き出して言及されているのでしょう。彼らはモーセが後にこの書を編集し、イスラエルの人々をカナンの地に導いた時に、神がアブラハムとイスラエルの子孫に約束した土地に住んでいた邪悪な人々でした。

九章二〇〜二二節 さて、ノアは、ぶどう畑を作り始めた農夫であった。ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。

少なくとも古代の伝承によると、ノアとその家族は、大洪水後のかなりの年月、アララテ山の北側にある低い斜面に住んでいたということです。ノアは、大洪水の後も、三百年生きていましたが、もうそれ以上息子たちを持ちませんでした。セム、ハム、ヤペテは、ノアの近くに住み、間もなく自分の子どもたちを育て始めました。

これらの三人の息子たちみなが生まれたのは、ノアが五百歳になった後（創五・三二）で、少なくともノアが五七五歳になる前でした。なぜなら、ノアの洪水が起こった時に彼らはみな成人し、ノアが六百歳になる前に結婚していたからです。もちろん、アダムの性質は依然としてノアの遺伝形質の一部でした。洪水前の

暴虐に満ちた不道徳な環境と関連づけて、この事実はノアと息子たちがサタンの誘惑に晒されたままに置かれる運命にあったことを示しています。神を真に信じる者であっても、特にハムは反逆心と肉肉的思いをひそかにもっていたように思われます。悲劇的なノアの泥酔の物語とハムの反抗的な心が突如として暴露されたことは、ノアの洪水がきよめるためのさびきであるにもかかわらず、人はなお罪人であり、サタンは依然として「不従順の子らの中に働いている霊」である事実を描写しています（エペ二・二）。しかし突然起こった家族の危機に当たつてのセムとヤペテの行動は、ハムの行動とともに彼らの性質に対する手がかりと、ノアの注目すべき預言の機会を提供するものとなりました。

聖書の中で「ぶどう酒」について述べられているのは、ノアの酩酊と恥とを組み合わせて述べられているこの部分が初めてです。疑いもなく、洪水前の人々はぶどう酒の性質をよく知っていました。そして、ノアはぶどう酒を造って飲んだ時、自分のしていることを全く認識していなかったと暗示しているところは聖書の中にありません。聖書は最もすばらしい徳の高い人であるノアの失敗でさえ、ためらわずに示しています。数百年もの間、悪い人々の攻撃に強く抵抗し、誰も経験したことのないような反対と失意に直面しながらも固く節操を守ってきたノアは、これからはすべて平和となり勝利が得られるだろうと思われた時、常に抱いていた警戒心を解きました。あらゆる困難を経た後、ノアは、肉体の楽しみのために少し気をゆるめ、ぶどう酒を少し飲んだくらいでなんの悪いことがあるのでしょうか。

聖書は、ペテロの手紙第一、五章八節で「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています」と警告しています。サタンはノアの家族以外のすべての家族を、洪水前に墮落させるのに成功しましたが、ノアの家族を墮落さ

せることはできませんでした。しかし、サタンは今や機会を捕らえました。純粋な健康によいぶどう液から、ひとを酔わせるぶどう酒を造り上げることは、墮落と腐敗の申し分ない象徴です。発酵の過程は腐敗の過程であり、この腐敗によって生ずるアルコール性の産物を飲む結果は、いくつかの点で似ていて、肉体的にも道徳的にも人を「破壊」させます。それは本質的には発酵の過程と同じです。発酵の過程は聖書のどこでも、墮落の象徴として記されています。

ノアは、明らかに、飲み過ぎるほど飲もうとは思っていなかったでしょう。しかし、飲み過ぎてしまいました。ぶどう酒によって生じた身体のほてりのためか着ているものを脱いでしまいました。そして、ついに天幕の中で酔って寝てしまいました。ノアは新しいぶどう酒が酔わせるぶどう酒になっていたことを知らなかったとして、これを盾にとつて失敗を弁解することはできません。しかし、もつとも困難な環境の下で、神の命令に忠実に従った長い生涯で、ただ一度、この時、ふとした道徳的失敗を犯したように思われます。ある学者は、洪水前の異なった大気条件が、このような腐敗の過程をなんとか阻止していたと述べていますが、この考えには、道理にかなった科学的基礎はないようです。

九章二二、二三節 カナンの父ハムは、父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。それでセムとヤペテは着物を取って、自分たちふたりの肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。彼らは顔をそむけて、父の裸を見なかった。

ノアが寝椅子に横たわっていた時、たまたまハムがノアの天幕に入って来ました。半覚醒状態で服を脱ぎ

捨てた時、ノアの服は寝椅子から床に落ちてしまったことでしょう。

おそらく、これは大洪水後、数十年たってからの出来事でしょう。なぜなら、少なくともハムの四人の息子のうちでもっとも若いカナン性の癖を、祖父ノアが熟知するくらいの年齢にカナンが成長していたからです。ハムは、セムやヤペテと同じように、ノアからは少し離れた所に自分の住居を持ち、時々訪問してノアと交わりを保っていたに違いありません。

ノアが自分で作ったぶどう酒を味わっていた時は自分一人だと思っていたし、その日はほかに人に会う予定もなかったことでしょう。もし、訪問を予期していたのなら、きつともっと注意深かったでしょう。しかし、彼は用心していなかったため、サタンはこの絶好の機会をとらえ、どうしても父をちよūdその時訪ねたいという願いを、ハムの心に植えつけました。

ハムが天幕の中に入った時、父親が酔っ払って裸で眠っているのを見て驚きました。しかし、見ただけではありません。この文脈で「見た」ということばは、ヘブル語では「見つめた」、それも満足を持って見つめたというような意味です。

ある注解者は、ハムが同性愛的欲望を感じ、二四節の「自分にしたこと」ということばから、父に対して同性愛的行為をしたのではないかと解釈しています。しかし、そんなことは書いてありませんので、そのような解釈は不適当です。ハムは信仰者でしたし、前の世界の道徳的腐敗を逃れるために自ら箱船に入った人でした。

ここで取り扱われているハムの行動に関するより可能性のある解釈は、父の権威と道徳的誠実さに、長い間、心の奥底で憤慨していたことを表わしているということ。おそらく、ハムの性格には肉欲的、反抗的傾

向があり、それまでは父の霊的強さと族長としての権威によって制約を受けていたのでしよう。

しかし、今は目の前で、自分の父の人間の弱さとその結果を見て喜びました。今まで自分の欲望や野心を押しさえつけていた抑制から解放された気でもしたのでしょうか。兄弟達も同じ満足感を味わうだろうと思い、早速出かけて兄弟たちを見つけ、そのうま味を知らせようと思いました。ヘブル語の文章では文字通り「喜んで語った」ことを意味します。

しかし、セムとヤペテはハムとは大分違った反応をしました。ノアの天幕へ急ぎましたが、彼の弱さと恥を樂しむためではありませんでした。むしろ彼らは父を見ようともしませんでした。ノアが脱ぎ捨てた着物で彼の裸をおおい、できるかぎり父を助けようと思いました。彼らは口ではハムを非難しなかったようですが、口で言うよりもはるかに強い非難をその行動で示しました。

ハムの罪には、不道徳な欲望や見たものに対してのわいせつな楽しみが幾らかあったかも知れません。しかし、それよりも父の権威に対する反抗、すなわち、ノアが家族に百年以上も教え、強制していたすべての道徳的基準に対する憤りという罪があったのです。基本的には、彼の行動は神ご自身に対する憤りの態度を暴露したのです。その態度は、ハムでなくても彼の子供たちにいつかきつと爆発的に現れるはずの性格上の特徴でした。

九章二四節 ノアが酔いからさめ、末の息子が自分にしたことを知って、

そのうちにノアはぶどう酒の酔いからさめました。ノアは自分の身体に掛けてある着物に気づきました。

明らかにだれかがそこに掛けたものでした。彼は前に脱ぎ捨てたことをかすかに覚えていたことでしょう。しかし、いずれにせよ、服を着て昼寝をしようと寝椅子に横たわっていたなら、そのように掛けて寝るようなことはしなかったはずですよ。

妻がまだ生きていたのなら最初は妻に、次に息子たちに、何が起こったのかわかるまで徹底的に尋ねたことでしょう。自分の道徳的過ちを恥じていたにもかかわらず、ハムの罪の方がずっと大きかったことに気づきました。それは父に対してだけではなく父の神に対する反抗と不信の思いを表わしていたからです。同じように、セムとヤベテの行動は、明らかに父親に対する尊敬と主に対する敬虔な信仰をあかししていました。

## ノアの預言

こうして自分の息子たちの心の奥底まであからさまになったので、ノアは神の靈感によって二五～二七節の、実にすばらしい預言的内容を持った宣言をしました。こうして明らかにされた未来に関する洞察は、あの程度は息子の性格を見抜くことのできた洞察力に基づいていたに違いありません。彼らとその子どもたちの性質を知っていたため、それぞれの遺伝的特質と、父親たちに教えられたことや示された模範によって、子孫が将来必然的にたどる傾向のある道をノアは予見することができたのです。もちろん、もっと大切なのは、彼が御霊によって語り、御霊が語らせるままに預言したことです。まず、「若い（末の）息子が自分にし

たこと」はどんなことだったのかよく考えて検討しなければなりませんでした。ここに若い息子とあるのは、実際には「末の息子」を意味するので、ハムはノアの末息子であり、ヤベテが長子なのです（創一〇・二二）。三章一五～一九節の大預言がアダムの墮落の結果であったと同じように、この預言はノアの墮落の結果として与えられたことは実に意義深いものです。

この二つの場合の類似性は驚嘆に値します。アダムもノアも、地を満たし支配するように命令されました。実際に、彼らのうちどちらも、現在世界にいるすべての人の祖先です。どちらも果物を取ることで罪を犯しました。ノアはぶどうの実、アダムは善悪の知識の木の実でした。その結果としてどちらも裸になり、他人から着物を与えられました。そして、その預言は、その時から今まで人類に影響し、のろいをもたらしました。しかし、こののろいと共に、究極的救いに関わる祝福と期待もありました。

使徒の働き一七章二六節によれば、神は全時代を通してすべての国の人々のために、それぞれ決められた時と場所と目的を持っておられます。どの民族も国家も、全体として人類のお互いの生活に貢献すべきでしたが、各々の国家の何にも増して重要な目的は、「神を求めさせるため」（使一七・二七）でした。三つの民族の主な動向とその働きの基本的輪郭は、創世記九章二五～二七節に記されている注目すべきノアの預言に示されています。

九章二五節 言った。「のろわれよ。カナン。兄弟たちのしもべらのしもべとなれ。」

ノアの預言的ことばはハムの息子カナンの人格ゆえに、第一にハムに向けられました。それからセムに、

ついでヤペテに。この順序はおそらく前述したように最も若い者から最年長者へと向けられました。ハムの犯罪の重要性のゆえにハムは最初に注意をひきました。自分の息子セムとヤペテには喜んで祝福を与えることができませんでした。ハムの多くの子孫はのろわれると預言的に知っていましたので、自分から息子のハムに直接のろいをかけることはできませんでした。ということ、その代わりに彼は、いわばこう言いました。「(のろわれよ。カナン。ではなく)カナンはのろわれている。何故ならば、彼は兄たち(クシュ、ミツライム、プテ)と共に、父親ハムの世俗的で肉の性質を受け継いでいたからである。」

この、のろいはカナンだけに対するものか、それともハムの子孫すべてに対するものかという問題は、長い間、論争的となつています。カナンだけに当てはめると、三つの問題が生じます。最初に、どの預言も対照的で、全世界的なものであり、ノアのすべての子孫に適合するはずのものになります。次に、カナンだけに關するものだとしたら、それは大変散発的に、そして、不完全にしか成就しなかったことになります。例えば、カナンの子孫には、古い古い時代に最も偉大な国家二つを構成したフェニキア人とヘテ(ヒッタイト)人も含まれます。他のカナン人と同じようにこれら二つの民族も、結局、敵に支配され、滅ぼされたのは事実です。しかし、セムやヤペテの多くの子孫も同じような運命に会いました。

最後に、父親ののろいとなったのはカナンの罪ではなくハムの罪でした。そして、のろいの重荷を負うのにハムの四人の息子の中から一人だけ選ぶというのはノアにとってふさわしいことではありませんでした。ですから、こののろいはカナン族のものと言うよりハム族のものであり、預言の条件はハムの息子の一番若い息子まですべての息子に及んだことを特に強調するためにカナンに言及されていると理解することが必要だと思えます。その時の状況を見ますと、それはまた、ノアの心痛ゆえの反応であったかも知れません。

ということ、ノアの末息子によって自分の心が悩まされたため、預言でハムの末息子を特別に選びだしたのかも知れません。

しかし、そののろいが一般にハム族に適用すると推定した場合、それはどういう意味で、どのように達成されたのでしょうか。「兄弟たちのしもべらのしもべとなれ」というのは、「奴隷の奴隷」という意味にはないはずで、このようなことはカナンを含めてハムの四人の息子の子孫のうちで一度も起こっていないからです。ハムの子孫には、シメール人、エジプト人、エチオピア人、その他に古代の偉大な国家も含まれていました。そしてさらに、現在の偉大なアジア民族の幾つかをも含んでいる可能性がかなりあります。

残念なことですが、ハム族ののろいを特別に黒色人種に当てはめて、黒人を経済的服従者、または奴隷にするのさえ正当化するために用いている注解者が幾人かいました。しかし、預言はアフリカ黒人だけでなくハムの他のすべての子孫(ほとんどは黒人ではない)に適用していることは明らかです。そして歴史を通して、ハム族だけがハム系でない人々より多くこのような服従を経験しているわけではありません。

「しもべらのしもべ」が「最も低い奴隷」を意味しないなら、一体どういう意味なのでしょう。旧約聖書で「しもべ」ということばが頻繁に用いられていますが、「しもべらのしもべ」ということばが使われているのはここだけです。次の二節で、カナンがセムの「しもべ」となり、またヤペテの「しもべ」となり、ノアは予告しています。というのは、ハムの子孫の国は他の一つの国のしもべ、または一つの国のグループのしもべとなるのではなく、他のすべての国のしもべとなるということでした。この唯一の全世界的「服従」は多分、最上級の形の「しもべらのしもべ」をある程度意味しているでしょう。

しかし、ハム族の国は、一度もヤペテ族やセム族の国に世界的に制服されたことはなく、カナン人ですら

制服されたことはない、と反対する方もいるかも知れません。この反対に対して言えることは、しもべは必ずしも奴隷ではないということです。實際上、しもべということばは奴隷を指すよりも、「家令」（家庭内では尊敬すべき身分）のことを指すことがはるかに多いのです。

事実上、聖書で「しもべ」ということばを使っているのはここが初めてであり、そのため、特別に重大な意味があることは明らかです。ある意味では、完全に全世界のしもべらのしもべとなり、私たちのためにのろいを負ってくださったキリストを預言しているのかも知れません（ピリ二・六〇八、ガラ三・一〇、一三）

この箇所状況に当てはまるもう一つの可能性があります。この場合、「しもべ」が「家令」を意味するのなら、この予告は人類に対して物質的に奉仕することになります。全般的に人間は、物質世界とその動向、そしてその中の生物を支配する神の家令です。人の墮落のため、地はもうすでに神の「のろい」の下におかれており（創三・一七）、それから人は「額に汗して」生命を維持するために土地を開発し、資源を利用するようになります。しかし、人はまだ世界とその生き物を支配し服従させる責任がありました（創一・二八、詩八・六〇九）。そして、この責任は、まず第一に、人は支配すべきものを理解するために努力することを要求しています。これは知的努力、研究、知識、そして「科学」という用語、「哲学」という用語に含まれるすべてのことを要求していることでしょう。

しかし、人間の最も重要な責任は、肉体を持った子孫で地を満たす（創一・二八、九・一）だけでなく、「主の栄光を知る知識で」（イザ二・九、ハバ二・一四）満たすべきことです。また、他の人に「主の御名を呼ぶ」（創四・二六）ことを教え、救い主が来られるまで神の約束を保持して伝えなければならぬということです。

こういうわけで、人は地を支配する神の家令として、基本的になすべき三つの義務がありました。それは（一）霊的義務—神のことばの知識を受け入れ、保持し、教えること。（二）知的義務—神の世界に関する知識を広げ、教えること。そして、（三）身体的義務—人の身体的必要や慰労のために要する物質を備えることによつて、知的、霊的役目を、より効果的に果たすことでした。この三つの義務は、実際、三分された人間の性質と一致します。そして、それは霊、魂、体の三つです。

どんな人も、ある程度までこの三つすべての能力がありますが、普通、人によってどれか一つがより優れているものです。すなわち、ある人は身体的に、ある人は知的に、ある人は霊的方面にすぐれています。同じような考えが民族にも当てはめられます。歴史的にみて、ある民族の動機は主として宗教的面で規定され、ある民族は哲学的、科学的思考によつて、そして、他の民族は物質的（または、いわゆる実用的）な追及によつて動議づけがなされています。

ですから、現在のすべての民族の創始者である三人が、父親によつてその三つの能力の、特に強調すべき性格としてその中の一つを持つ者と認められたということは大切です。セムは主に霊的面に、ヤペテは知的面に、そして、ハムは身体的面で動議づけられています。すると、もちろんごく一般的な見方ですが、彼らの子孫である民族も遺伝や親の模範から同じことが言えるのです。

各自はそれぞれ神のしもべとみなされてきました。セムは霊的面で、ヤペテは知的面で奉仕しました。ですから、身体面の奉仕が義務であったハムは、彼ら自身もしもべであったセムとヤペテに仕えることによつて、「しもべらのしもべ」となったのでした。彼が身体的手段を用いて食物、衣服、住居、武器、機械、交通機関、工学的発明、いろいろな用具を供給し、それによつて兄弟たちが人類と神に対して、よりよく霊的、知的責任を果たせるようにしました。このようにして、ハムは神に仕えました。

しかし、ハムは他の兄弟たちよりも、主がのろわれた地（創五・二九）のより近くにいたため、神ののろいを他の兄弟たちよりも強く感じたことでしょう。この意味で、人類に対する神の目的を果たすにはどうしても必要であったにもかかわらず、ハム族の責任はそれ自体「のろい」であったのです。もちろん、ノアのこの預言は、自分の恨みから出たのろいではなく、靈感による預言で、ハムとその息子たちの性質に適していたもので、見てわかるように、おもに身体的要件に関わるものでした。

次の章でもっと徹底的に検討しますが、セム族の国（ユダヤ、アラブ、シリア、アッシリア、バビロニア、ペルシア等）とヤベテ族の国（インド・ヨーロッパ）がよくわかれば、残りの民族はすべてハム系となります。一般にハム族は、科学、哲学、神学とは無縁に近いもので、おもに物質面の追及に従事していました。しばしば彼らは、偉大な発明者や科学技術者であり、同時に、農場で勤勉に働いたり、戦場の勇士たちでした。

ハムの子孫には、古代最初の二つの偉大な帝国を築き上げたエジプト人とシュメール人、またその他に、フェニキア人、ヘテ（ヒッタイト）人、カナン人等、偉大な国が含まれていました。現代のアフリカ民族や今日の中国人と日本人を含めた蒙古民族、またアメリカ・インディアンやオセアニアの島民も、多分、主としてハム族から来た人々でしょう。

ハム族が人類の「しもべ」となっていたことはいろいろな面から見られますが、そのうちの幾つかは次に挙げる通りです。

- (1) バベルでの離散に続き、世界中ほとんどの場所の最初の踏査者、開拓者でした。
- (2) じゃがいも、とうもろこし、豆類、穀物など、基本的な主要食物の最初の耕作者であり、また、いろいろな動物を初めて家畜として飼いならしました。

- (3) 基本的な建物の形式、建築用の道具や材料を開発しました。
- (4) 衣服に使われる布地、また裁縫やはた織りに使われる機械の大部分を初めて開発しました。
- (5) 多くの種類の薬品、手術方法、外科用医療器械を発見し発明しました。
- (6) 基本的な数学、測量学、航海術のほとんどの概念を考案しました。
- (7) 商業、貿易で使われる機械（貨幣、銀行、郵便制度等）を開発しました。
- (8) 紙、インク、木版印刷、活字印刷、その他文書や通信の装置を開発しました。

歴史をさかのぼって調べてみると、人の身体を維持し、身体にとって必要な基本的考案や制度の開始はほとんどハム族のどの民族かによって始まったものであることがわかります。ほんとうにハム族の人々は驚くほど多くの面で人類の「しもべ」です。

さらに、この預言には反対の面があります。ハム族は、通常、探検や発明に関する限り独力でやって来ましたが、それ以上に進むことはありません。ヤベテ族とセム族は、遅かれ早かれ、ハム族の領域と発明を引き継いで、さらに、それらを彼らの「人類への奉仕」の達成に役立てるために発展させ利用しました。ハム族は時には、特に黒人の場合、実際に他の民族の奴隷にさえなりました。主として世俗的、実務的な事柄に関する遺伝的形質を持っていたので、ハム族は知的・哲学的に明敏なヤベテ族とセム族の宗教的熱意によって、遂には取って代られました。

これらの実に一般的で、幅広い、民族的、人種的特徴は、個々人の遺伝的基礎に多くの例外のあることを明らかに否定するものではありません。さらに、この預言は未来に起こる事実の神による描写であって、これらの預言の達成のために、決して、セム族、またはヤベテ族の慎重な援助を要求しているではありません。

ん。黒人、またはその他のハム族が、ノアの預言に基づいて力づくで征服されるべきだとの意図もありませぬ。この預言は内的遺伝特性と神の導きによって達成されるはずで、人によって課された人為的制約等によって成就されることはないはずです。

九章二六節　また言った。「ほめたたえよ。セムの神、主を。カナンは彼らのしもべとなれ。」

ハムの人類に対する物質的責任と共に、のろわれた地との根本的関係を予告したのち、ノアは注意を次の息子セムに向けました。セムの、子としての尊敬に満ちた行為だけではなく、明らかに、父親が彼の生活を詳細に観察し、その特徴によってもセムは、長い間、主なる神に対する愛と神の約束に対する信仰を示していました。

ノアは神の霊的祝福が、特に、セムにとどまっていることを知っていましたので、「セムの神、主はほむべきかな」と呼ぶことができました。セムは契約関係において、主を個人的に知っていました。そして、彼は主をエホバの名によって知っていました。このことは、明白には述べられていませんが、結局、人類に対する神の大きな祝福、約束の女のすえがセムを通して世に来るだろうことを強く意味しています。セムは神の人類に対する霊的祝福を伝達するに当たって、カナンや他のハムの息子によって将来も妨げられないはずでした。なぜなら、実際に、カナンはそのことを達成するため彼を助ける「奉仕者」だったからです。

九章二七節　「神がヤペテを広げ、セムの天幕に住まわせるように。カナンは彼らのしもべとなれ。」

最後に、ヤペテについて述べましょう。ノアは、ヤペテは「天幕を広げる者」となり、ハムはこのことを達成するためにヤペテに仕えるだろうと預言しました。ここで用いられているヘブル語はパタで「天幕を広げる者」とするのは通常の用語ではありません。ただ、この場合だけ、そのように訳されています。これは明らかに地理的な広がりを目指しているわけではありません。そういう意味でしたら、ヘブル語のラハープが適しているはずだからです。実際に、セム族もハム族もヤペテ族と同様に地理的な広がりを持っています。

このことばは通常、「誘惑する」とか「説得する」と訳されています。しかしながら、この節では特殊な形で取り扱われています。ただ一度、ここで用いられ、翻訳者たちが一致して「広げられる」と訳しています。これは、「開かせる」(ヘブル語でパタハ)に由来しているようです。

これらすべてを結び合わせて、ここで考えられることは、精神的拡大の一種と考えるのが最も妥当と思われることです。もし、人が「誘惑された」とか「説得された」ということであるなら、彼の以前の意見は変えられた、つまり「思いを変えた」とか「心を開いた」ということになります。ヤペテは「心の開かれた人」でした。したがって、彼の子孫もそうでした。ヤペテ族は知的好奇心に富み、思考の世界の探検家となったことでしょう。ハムが肉体的面で、セムが霊的面でそうであったように。

ヤペテは知的に大いなる者となっただけでなく、また、セムの天幕のうちに住まう者となったはずでした。これは「交わりを保つ」という意味のことばの一般的な用法です。こうして、「悪の天幕に住む」(詩八四・二〇)は、「神との交わりから離れ、邪悪の中に住む」ことを意味します。ヤペテは「神の幕屋」と同じことばの天幕には、文字通りにはセムと共に住みませんでした。セムの遺産である霊的祝福の分け前

にあずかるはずでした。そして、この霊的祝福こそ、ノアが預言したセムの受け継ぐものの真髄をなしていました。人類が神の大いなる霊的約束を受け継ぐ手段はセムを通して来るはずで、ヤペテもまた、セムとの交わりを楽しむことにより、これらの祝福を彼自身が受けるに値する者となることでしょう。セムとヤペテが彼らの父と彼らの父の神に対する尊敬の意を一緒に表すにつれ、彼らは一致して「主なるセムの神」を礼拝するに至ることでしょう。他方、ハム族はそうしないで、彼らが考え出した他の神々に、多分、従うだろうことが暗に示されています。それにもかかわらず、ハムの「奉仕」は、すべての人々に対する真の神の目的に貢献することでしょう。

ノアの三重の預言が、おおよそ、原則的に歴史を通して実に豊かに成就していますが、確かに、個人的に見ると例外があります。すなわち、ハムの特別な子孫は実に霊的精神の持主で、真の神の实り多きしもべとなつたかも知れません。ヤペテのある子孫は、心がにぶいにもかかわらず、工芸技術の面では優れていたかも知れません。セムのある子孫は、無神論者であるかも知れません。

しかしながら、概して、セム族は唯一神に焦点を合わせた宗教的動機によって行動づけがなされる場合が多く、ユダヤ人、回教徒、ゾロアスター教徒などによく見られます。特に、ギリシア人、ローマ人や後世のヨーロッパ人やアメリカ人のようなヤペテ族は、科学や哲学の面でその発展に貢献しています。エジプト人、フェニキア人、シュメール人、オリエント人、アフリカ人などのハム族は、地上に居住地や文明や工学等を開発する偉大なパイオニアとなりました。

もちろん、各民族の流れをたどると他の民族に影響を与えていますし、異なる民族、国民の混じり合いがたくさんあります。そこで、一般的傾向には多くの例外がたくさんあると言えましょう。しかし、これらの

一般的傾向を認めることが可能で、しかも彼らは、数千年前のノアの預言が概括的に述べた型に従っているのです。セム族は神学的面で、ヤペテ族は科学的、哲学的面で、ハム族は工学技術の面で優れています。

これら三つの民族の流れは三人種ではないことに注意してください。ある人々は、セム族、ヤペテ族、ハム族を、いわば黄色、白色、黒色、すなわち、モンゴロイド、コーカサス、ニグロイドの三つの人種として考えていますが、これは聖書が教えていることではありません。また、現代人類学やヒトの遺伝学で教えていることでもありません。これら三つのグループの国民のどれにでも黄色の人々や黒色の人々を見いだせませす。聖書は「人種」ということばを用いていませんし、このような考えを認めてもいません。現代の「人種」の概念は進化論的思考に基づいています。進化論者にとって、人種は新しい種に進化する過程にある種のことです。そして、この考えが現代の人種差別の基礎です。セム、ハム、ヤペテに端を発する実際の子孫は、次章で検討するように、一〇章の検討で見極めることができます。

九章二八、二九節 ノアは大洪水の後、三百五十年生きた。ノアの一生は九百五十年であった。こうして彼は死んだ。

この二つの節は、ノアの物語と共に九章のしめくりです。ノア自身は、ノアの子孫のように、洪水に引き続いて起こった大気 conditions に余り影響を受けなかったので、洪水後三五〇年も生き、九六二歳まで生きたエレデと、九六九歳まで生きたメトシェラを除いては、どの祖先よりも長生きし、九五〇歳になって死にました。

もし、創世記二一章の系図に間隙がないなら、ノアはアブラハムが五十八歳の頃まで生きつづけていたこととなります。一方、次章で示すようにこの年代記には、はつきりした期間ではありませんが、少なくとも幾つかの間隙があった可能性があります。しかし、少なくともノアは、バベルで諸民族が離散した後まで生きていたと思われます。